縁起部類

五

イ 曽 4
600
159

特
門 イ 曾 4
號 610
巻 159

大師河原

當山畧縁起

平間寺

厄除弘法大師畧縁起

抑武藏國橘樹郡川嵜の郷大師河原平間寺

厄除弘法大師の尊像ハ

人王七十五代崇徳帝大治二年此浦に平間兼乗と云

浪士ありて生國尾州の産にて父ハ藏人兼豊とて

鎮守府将軍兼陸奥守源義家に仕奥羽前後の

征伐あり供奉し屢戦功を奏すといへとも聊寃枉に

坐せられて漂泊の身となり四方を傳沈して遂に此地に
因とさだめて住す利無欲性質篤實にして常に
三寶を敬ふの志厚しといへども家貧の為に漁猟を
旦暮乃活業となしてけれを改め易ふ事に為便なく心ならず
星霜を送りける既に四十二歳悪星厄難の歳なり
値りて只管に災厄消除せん事を佛神に祈りけるに
或夜貴相異僧忽然として来りて告曰我昔在唐の日

手親吾像を彫刻し誓願をして此像我本國に至り
有縁の霊地に流れ着きなんと誓て則海中に投入しに
年久しく滄海の波浪に浮沈し今幸に漂流して
此浦に来り毎夜に光明を發せし此所を標り
彼像を網し捕て永此里に化益を垂しめば汝現世には
災厄諸難を除かせしめ又は富貴の身となり當来は
必善果を感すへし努々疑ふことなかれと云て平間氏

歓喜渇仰せずと覚ゆる頃一陣の暁風枕を侵し
恍焉として夢なる事を知るや否一室猶餘香を
とゞめて馥郁たり益奇異の思をなし翌夜霊夢の
ごとく海上を眺望するに果して一條光明赫奕たる即
舩を漕網を投しく千尋を探るに神威厳然たる
尊像網裏を耀し其光景前夜影向せる異僧に
毫釐もたがふ事なし依て辨し奉るに弘法大師の尊像

なり利平間氏深信膽に銘し一たびハ恐一たびハ喜び
手の舞足の踏處をしらず即一宇を建立し彼尊像を
安置し奉りぬ平間氏草創なるを以て寺を平間寺と
号し又兼帯の名をとりて金乗院といふ元金剛密乗の
義によるのゆへなり山を金剛山と号す高野山金剛峯寺
と称へるを摸擬せるなり此里　尊像出現せし地なるを
もつて大師河原といふ是亦不可思議の良因縁といふべし

夫より以来四衆の徒此尊像を崇帰信敬する者
諸願満せずといふ事なし就中老少男女の正厄前後の
除厄を祈るに霊応を蒙るの毫舌の及ぶ所にあらざり
けしも故に世挙て厄除大師と崇る事職として
由る所なり　今あらゝに縁起の一毫を掲くと云

及瑰塚略縁起

文化十二年乙亥九月北摩にて求む
宗信
八幡にて

日東山正法禪寺及魂塚略縁起

當寺の開祖東岩和尚ハ生縁異國の人ニ天平勝宝六年の頃日本ニ来朝たまひ此萱津の浦に住庵しけり殊勝の出家なれハ民俗おのづから皈依して善根に趣けるこゝろに光仁帝の御宇宝亀十一年庚申八月奥州信夫の里より若き人夫妻上京する事ありけり夫を恩雄といひ婦を藤とよふ遂くと此萱津村に来りて彼藤女こゝにおゐて病死せり病中に一首の和歌を詠し恩雄に

送残せり。忘るなよ我身きえなハ後の世のくるしきを庵に託
をたのまんと縁せり然に恩雄も悲歎の余り東岩和尚を請
して葬礼し我身も剃髪して東岩和尚の弟子となり如の
藤姫の塚の辺に庵をむすび終日念仏して彼亡婦の
菩提をそ弔ける

此地の人恩雄を信夫の法師といへり恩雄ハ二十一歳藤女ハ十六才く彼法名を大空了覚信女といふ寛
十一年庚申八月十四日に逝す正四位
中納言兼右衛門尉の息女なり

一歟后天應元辛酉年秋此頃なり
しく京都より橋本中将といふ人関東に下向此折柄此所に寄粟殿

の森の古跡なときゝしこ遊覧しけるに彼信夫の法師か庵に窺
すひしに本尊ハ薬師如来にしていとふるく庵主のいまた若鋭して
いと殊勝に念仏三昧を唱るを見て慌く其由縁を問けるに恩雄
法師答けるハ我ハ奥州信夫の里の者なり此本尊薬師如来ハ我妻
藤女といひし守仏なり此藤女ハむかし橋本中将といひし殿上人
奥州に左迁の御身となりたまひて彼配所に起臥したまひける朝夕
給仕なりける女の情しか契浅からぬ中にて出来し女子となり

ける嚢に彼卿ハ勅免ありて帰洛の折から我都に帰るハ遠く吾
彼地に残しおかせて本尊に彼薬師仏を祭しまふ一躰を彼
卿ハいつしかうけ都にて何の音信もなく打過しに彼妾ハ一子を産
せり女子にして名を藤女といひ生長の後我妻となれり彼母ハ其
十月の頃より病の床に伏しか療養の奇もなくて遂に喪死ぬ
或時藤女のいふ私ハ妾母ハ早く逝しぬ父ハ都にましますと聞の嘆き
いまた逢ふ事なし願くハ都に登り父にあひまゐらせんと思ひしと云り

我もまた彼ゝ心のうち推量して不便におもひいさ頼に登りて父の
先行衛を尋ねんと彼薬師如来を守護し藤女とともに国を
出立しつ日数をへて尾張国萱津の里まで来りしに妾
藤女ハおもふさま不例にして療用の功験もなく遂に此の里で
死去いたしぬよりて此所に葬りたり我もまた世の無常を観
し出家の身となり彼菩提を弔ふとて妾語りけれハ彼殿上人
さて八條中将とハ我ぞ見よ先年奥州に下りしの折から

なりき帰洛の後も正四位中納言に昇進し右衛門督を兼ヌ故に
公務に繁くして思ひながら音信を絶ながらのびも公役にて
東関に下向ぬされハ其孫女といひしハ我子なれ今此
薬師如来ハ聖徳太子の御作にして吾が守佛なりしを今見とて
先年奥州に赴しぬ際に今此処にてしのしをりしも偏に
此薬師如来の御引導にてましますとて感涙袖をしぼりけり
然れど中将との八孫女に早世して逢さる事を悲歎しける中に

不思議に東岩和尚此處に御尋訪ありしかくのことしも
喜ひ偶に御感涙ましましけるに我本國にありし時漢帝
ハ李夫人の姿を見んとて辺國より貢上し反魂香を焼きて
彼李夫人が姿を見玉ひり我少人なりて彼像香を将来せり今
此香を焼て薬師の姿を見せしめんとて其夜彼中将恩雄
法師等を彼塚のもとに伴ひ秘法を修しまひ彼香を焼きけれハ
不思議や二八ばかりの容顔美麗なる女性香烟の中に見つ隠れつ

抱き止んと走り寄れハ綱と共に消うせぬ彼中納言の卿ハ悪善
の綱をおさへて悪念を残す色ひのかりかりの袖にとゞまらぬ
むかし悪霊と現しすひけれハ恩雄法師もむかしの契を今の栱に
覚て泣く　あはれひきや花のすがたの香を留めて綱のうちにみ
まゆ色しとハと現しまふ支分藤姫の塚を魂塚といへり
厥后萱津の東岩和尚の庵を此近邊の諸人移建て正法寺
と名けり此時いかる宗旨の副縁なす故に本末の定なし其の
薬師如来を正法寺の本堂に安置しまゐらせしに恩雄
法師の我生涯ハ此草庵に倶に安置して不覚怪女の菩提
并我等及一切法界に礼拝供養しまゐらせまし頼入らへて
東岩和尚も其志願に感じ給ふ故に此佛を今に残す薬師
と称しまゐる其後彼橋本の卿も　君の御暇を乞て此処ふさ
ぎ剃髪し東岩和尚の弟子となり恩雄法師と同庵し
倶に菩提をぞ弔ひける彼中納言の江戸時の歌に

瀧澤

奥州松島見物記

逢て後おもふこゝろの峯ハ晴りけり子をおもふこゝろの闇き世の中

尾州海東郡萱津村

日東山正法禪寺

青龍山瑞岩円福禅寺 并名所旧跡

本堂 長さ二十五間 横十八間 但し 七ツ間之室中 孔雀の間 或ハ 室中 正観

音天皇御寄附 政宗公寄附なる 御丸太ハ大守公 代々の御位牌 正面

らんかん 雲に天人の彫ものの絵ハ 松竹梅 鶴鳳凰 …の 欄間 絵ハ

狩野左京 ● 上段の間 うしろ 板絵天井 ● 中段の間 大広間 遠州 … 絵ハ

松竹梅 … 模写 …の図也 ● 文王の間 大守公 御成座敷也

絵ハ周の文王 … 狩野 法眼 筆 ● 次の間 絵ハ

絵葉 鷲の絵 山水 … 九帝 ● 孫の間 絵ハ 松 ● 菊の間 絵ハ白鷺

之 ● 絵の間 絵ハ 鶴 虎 松竹 ● 仙人 小野 … 吉彼 … ●

和歌 … 長九間 横五間 … 向 … 彫物 … ● … の

… 山海の … 天井 …

極さいしきらん間に鳳凰牡丹に孔雀梅に鶯かざりて廊下某
秋の七草に鹿その外つむぎの彫物ぜん代にして見事つくせり赤く
言語にたへし・廊下は長十八間横巾八間欄干ならび・大くり長サ八間
其外の欄おし四方四面・方丈の座敷は天井松・紅白の梅其外八
政宗公朝鮮国より持せ来る種なりとかんかん鉄の檀彩色かきつくすは
二祖伝より是ハ寂山法敬禾上西明寺時頼公の御開基の岩窟にて候へ
始ハ松島寺と号して天台宗なりしに子細ありてたいてんしけ
法身禾上寂山として延福寺とあらたむ天台の庭徒ハ福浦島へ流罪
せられ其後に天台の継にて焼失を文より此湾と経の鴻
こ歌くにち 政宗公御建立にて青龍山瑞巌寺と改
雲居禾上中かほにし寂山より雲居禾上にて八百拾三代に
一方丈より惣門まで二丁余せ切石疊敷にて十三壁此也・右ハ

陽徳院 政宗公の室にして田村御前の御墓所御堂 御霊屋 極さい
しきに彫刻たり継画玉・庵に円通院政宗公の御孫子の御墓所に綱
極彩色彫物八幡の御厨子一面に遠藤七人殉死・天麟院御由緒指揮にて
政宗公の姫君の御霊屋なり一御仮屋にし大円院より御所御殿
山寺路にて月見の御殿といふ 一五大堂是むかし秀ひら公人のすえ
起伏文字を納し堂とかたる月光太師の御作大仏明王・山王堂あり
一雄島是ハ霊窟の霊の院と號し見仏上人法華經の塔あり日々ふ
経論のうしなひての尼寺ま坊人佛像を二つ寿松本むかしみこ
く法師の今ハ方丈の霊森おきむかし松八百丈のうろ岩上にあり
一面に名もしらぬ名所あまたむかし西行法師も経をそへ見ありしふ
書きつけ集かきし昔とかのこれらハ
月にしくあのこれがひとそてすゝきちらむ雄こそかうらん

ともりき妻子をすてさるにあらずをいだき給ひて
我も婦りかまことものゝ色二黄もゆるさるむすきハたゞこゝろからん
かくこそあれば
西行かの妻子を人聴賂かゝる説諸嵐をおいて哉とかしあらおより
立かへる西行も諸嵐とおなじくんとありしより山里妻子に現して
京のことしこく枕く此山里尓ハ殊にこの寺の化しへのかや

寺内女人入日

一日　二日　四日　七日　八日　十一日　十二日
十五日　十八日　十九日　廿日　廿三日　廿四日　廿六日
廿八日　但シ春秋ひがん中　七月三十日

滝澤

秩父 定林寺縁起

十七番

十七番 秩父 定林寺縁起

武蔵國秩父郡十七番定林寺縁起

抑定林寺の草創ハ昔建久年中壬生良門が造立なり其由来を尋
ぬるに良門ハ野州壬生庄の地頭にて平性兇猛にして倹宦を欺きて忠良
を遠ざけ常に山野に殺生し罪なき人を害し仏法物詩破壊し毒ある人なり
平家の臣小林太郎定元といへる忠義の士有りしが常に是を諫めども更に
止まざれば悪日に熾盛なりしかば或時極めて切諫をなしけるに良門大に憤り
誅戮せんとせし由聞へければ定元今ハ諫むるも益なし又世道の網にかゝらん
も詮なしとて妻子を伴ひ意に出でて奔りける秩父郡に到りし此宥
なるとおもへ其人々ハ死して便るべき方もなければ何國へなりとも立
残んとおもひしに妻ハいとゞ物ひとりもなかりしかバ皆く爰にて究竟
いとけなき加若しけれども定業免れがたくて蓬が本の露と消りければ一節の
烟となし追善の営みも弱くも三歳乃小児を携へ再振り郷なる
斯て定元儀に心痛めける病を発し幽魂一片の雲に吹れければ小児ハ孤
独の身となりたる物なし一辺ならぬ空腹とて草葉にすがり渇き知

汝有り此由を聞ゑ猶境の身にして加る哀ハいかで捨んやと空照ハ
亡骸を葬り仕舞らせ亦かの小児を深衣の袖に抱き茅屋に皈
宿をなしける成長して林源太と名乗ぶ父の武勇ば受続人となり逞
しく兵術を学ぶ事一をせにて十才ばかり又浄侶の手に皈り因縁ありや深く
三宝に帰依し内教が曲に通達しければ空照もいたく能き主ば求て
事へさせんと下野の國へ赴ける道途にて吏人と覚しく一隊の人集
り今浴傍にさしけて有りしが中に主君源太を熟視して此者は我なれ
られ奉公の望あらば我扶助せんと詞かけられて空照答へけるハいかにも
仕へさせまほしくさふらふ婦大樹ハ何人になく渡らせ給ふと問しかば
我こそ当所の領主壬生の良門なりと聞て空照奇異の思ひをなし
主従の宿縁浅からざる因出度き果報なりと空照更に源太ハ猶
未詳に演説しければさすがの強悪邪見乃良門も且驚き且感じ
了仕に皈ゑ伴ひ体一字を与りて林良元と名乗らせ空照も
共に曹代近臣の列にぞ加へける空照にも種々引出物与けて

此とき旦は労ば論し来るに空照一物をも不受偏境の身財宝用
所なし唯法味を進ミ諸人は業苦ば除き快楽ばとゞるを以て所
為なしとて所る鳥邇近は縁従却にもはこつてひとなしいはんや合ば
しも皆散乱乃心を静めて一席の説法ば聴聞し終へて後押て
旬は法文を説きけるに比論方便の法徳おく良つ翻然として血
廻心懺悔し信仰帰依の心肉より起り聞法随喜の念外に顕れ忠
厚柔和の人となりけり空照の云る徳化法の大利殊勝乃事なりんき
照ハ定え退福の為良門を大檀那として一宇を建立し空照う
性と名ば合を定林寺と号しけり空照旧来安置せる当代の観
世音菩薩は当る縁ば本尊とし霊験あらたにましませば猶素
雲のごとくにた世界の如く来集り帰敬さらざるはなかりしが中に
僧くと大慈大悲は功徳著しく一度打むば当来ハ諸願成就し現
在にも七難ば消し寿福を与え未来ハ三世以来の悪業を滅
し往生極楽は悟ば得さしめ且二世安楽乃正郭は霊瑞見ふあり

多の月に参りありしに、良門ハ一生の間仏法三昧にして修經
正念に往生せり。恵姫ハ其後にいたり此定林寺を世俗ハ偏に妹寺とも
称しける也。定林寺開基の由来大概斯のごとし
○再説、此観世音菩薩を世俗ハ子育観音と称しける也。其故を尋る
に、信心の徒に依て病児の夭札を免れ、又ハ子乃育がたくて夭死せる
人の信仰して無病長寿なる子を得る類ひ数多ある故、此名
より称し来るなるべし。中ごろに一條を載て其見るべき證とす。此ハ正徳已
来武蔵国大里郡上新田に宗田豊二といふ者あり。観音を信仰しける
事多年や。或時妻女をともなひ諸寺諸山の観音に順礼す。に妻女妊
娠にて有けるが、此定林寺に詣ける時俄に腹痛して臨産の体なり
けれバ、定林寺観世音菩薩の霊薬有けるを乞ひ受て、安産異故
なりければ、急ぎ信心浅からず頂礼しけるに、妻女も小児の介抱男一人
の手に叶ひがたく、せん方なさに出生の小児を母乃り衣に包み御堂の縁
に捨置、先妻女を伴ひ帰りし、其上にて小児を連れに来るべしと也。史

婦ハ偏に大慈大悲の利生なりとて礼拝供敬して上新田へと帰り
ける処、一我家へ入て見れバ其前に老僧一人風呂敷包を携へ来り時
乃体忘して居たりける処、一ッの母へ志らせ由を語りあれを
驚きさて、疾も早くも小児を迎に参りける処、老僧の居し
風呂敷包の中に小児有。夢のごとく、何れも驚きあひ開き見れバ定林
寺に捨置たる我子なりしかバ、ふしぎにおもひて子細を僧に問んと
去れバ、僧も見へず、只一圓の光明定林寺の方へ飛去りける。是は
異香計りや、是実に救世大菩薩なりと尚けがしくありける事故も
なすことあれバ皆々感涙を流し、猶信心厚く歓喜踊躍のおもひをな
しにけり。後に宗田信心摂原豊忠として寺宮院にして田畑
多く菌境の豪家として成にける。其利益廣大乃抜苦与楽
備へとて日本諸山の観世音の尊形をえりすりて大鐘一箇を
鋳て定林寺の堂前にかけ奉て今現に存して都而里人の語
り伝ふなり。斯のごとく奇瑞多くして皆更ニ記さざれバ略す

世間の慈父悲母愛子を思ふ時観世音菩薩ニ祈念し給ふの験
挊ふひ渇仰の車ニ油さし一度も参詣信敬をなしたまへかし
近境遠里の群数普く此観音の照明ニ参じ今世の大印を
得たまはん事此由来略今を記し侍るのみ

観音の高徳を詠ぜる和歌

よみ人しらす

あら御をわけひさしき久し林てら
かよきしゆくまで夢をさまさせける

寛政十二年庚申夏六月

別當

丹生隼人藤原義正記

瀧澤

花洛勝地
東山銀閣寺略縁起

文化十二年乙亥六月京師於書肆求之 八冊ノ内 宗伯

東山銀閣寺略縁起

抑當寺ハ足利八世武將准三宮義政公世かん騒擾ふ倦く隠棲し給ふ乃舊地なり頃しも應仁の乱おきハ常に白刄御眼を遮て矢さけびれ聲御耳に止ざかく御心乃さぐらかなざるにより世塵を避させ度思召まうして佛乗の御願心深くおハしません景恕横川乃兩僧に参禪し給ひ終り文明五年政務を御嫡義尚公に譲て御飾を

おろし給ひて此淨地を開き銀閣東求堂等を造
營し給ふ十二の画樓并に銀閣金殿丹青の
數舎美麗を盡し給ふといへども星霜を移變
しく今僅に存在せるハ御祠堂の中にも
東求堂ハ入道贈相國乃御念持佛を安置す
そのむかし茶事ハ傍に弄び或ハ古賢の墨痕
或ハ後素其餘薫香立花石盆の伎藝をもたの
しみ給ひ唯世慮を逍遣さしめ給ふ處なり

然而東求堂に鈎釜を懸始給ふ是數寄屋の
濫觴といふべきものハ平蜘乃釜を鈎給ひし此時なり
といふ千載ハ相阿弥に命じて造らせ給ふに相國乃
御心を慰め奉らんとて諸國の大小名奇石珍樹ハ
不日に獻ぜ今も猶現存せる物悉佳名を失はず
實に庭中乃風光眞妙にして山水乃規則の洩
ぞ四時の壯觀何を以て比せん哉神仙の奇術も
佗なかるべし後代千載の軌範とする所東山第

一幽栖乃絶勝なり惜らくハ尊儀春秋五十六延
徳二年正月七日薨し給へ于時慈照院殿
准三宮贈太政大臣喜山常慶大居士と称し
奉る御在世にも此地を不朽乃精舎となし
給はむ台志ありしにより慈照寺とも亦銀閣
寺とも称挙する處也

銀閣

一上層　号潮音閣

聖観世音を安置ス　雲慶作

一下ノ間　号心空殿

東求堂

一阿弥陀如来　慈照院殿御念持佛

恵心僧都作

一慈照院殿五十六歳之御木像

一東求堂額

慈照院殿御筆

一同仁齋額

御同筆

一若松竹　相阿弥筆

一雲龍　古畫依破裂補遺　原在中筆

長四疊御間

一水鳥　古畫依破裂補遺　應擧筆

四疊半御間

一相國御茶室也平蜘の釜を鈎ニ給ふ所也

一御違棚梅画　古法眼元信筆

一御袋棚山水　雲谷周德筆

一嬰兒四季遊之圖　古畫依破裂補遺　狩野永納筆

一山水　同断　應擧筆

一六疊之御間　老松飛鳥之圖　相阿弥筆

一藤飛鳥之圖　古畫依破裂補遺　應擧筆

客殿

一上段　山水　別所恕磵筆

一東ノ御間　蘆雁　土佐光起筆

一中ノ御間　本尊釋迦如來　日護上人作

一仙人　海北友雪筆

一杉戸山水　相阿弥筆

一 西ノ間 山水　狩野隆也筆

一 西ノ入間 茶室袋棚 山水　池無名筆

一 梅畫　光源院 維明和尚筆

一 御茶之水 後林有之　慈照院殿御筆

一 十首之和歌 一軸

以上

瀧澤

尾州海東郡蜂須賀邑
[illegible]

文化十二年乙亥五月於[illegible]
宗伯
八柳月

穀殿明神最初物略縁記

抑此地の由来を尋ぬに伊弉諾伊弉冊尊ありて
日本男女の根元神也神代の往古民に五穀を作り
初め農業耕作の道を教へ給ふ御神也これによりて
穀ハ五穀の惣名にして諸民尊んで
穀殿明霊大神宮と崇めたてまつる其里ハ民
産業の守護を厳重に御神なる者ハ皆尊んで

一切の佛の秘密を諦上しまする石摺　御社の
傳は一つの秘密を惣持院丈相模滞して御経
此雜を上まする千時　人皇十二代景行天皇の
御宇皇子日本武尊東夷御征罰よ
越る野ニ関ふ焼草よ御危難せ人
御して神前の剱の内理業を御
則て難を御伝載わり是ハ薬の香の御と

御賛歎海くしよ是秘して香の有の名香ふ
傳ふ是本朝ニ献物の香の御事丈正ハ世に
香のめといふ筆を記ふ退ハ千内休をたて
故ニ御神の香乃御起其香の
日本武尊ハ熱田皇太神宮と成り
在熱田皇太神宮御利還有し御宝剱の
香のもの也人事を

豊田宮豊大神宮と遷り御縁は備へまつる

此霊験殊に御事ハ諸業五穀成就の御神

なりとハ諸人今日をおくり明日の業ひ皆身を立むとは

御神の御利益也一度すゝ参詣を暮所とし

ハん諸人ハもいや御縁べく社も結ひ給ふべく心持也

摂津国兵庫津

日東山正法禅寺

摂津兵庫築嶋寺縁起

摂州兵庫築島寺

摂州兵庫築嶋寺畧縁起

夫當寺の創造を尋るに人王七十八代二條院の御宇平大相國　帝都を福原ニ移さんとて五條大納言國綱卿ニ命じて地形を點見し九條を津とするに三条たらざりけれバ幾内の民役五万人を催して塩打山を崩して海面三十余町を築いさすと毎度なるに築破もとくえれ海となる時ニ博士安倍の泰氏占曰是龍神の惱む處なり三十人の人柱を立て大小の石ニ一切經を書ニ沈めて築給ハヾ功なる事

を得むやと彼の鴻といふ名あり因て生田の森に隠れ関を構へ老若
を問ず往還の旅人を擒にす盗老入道暗月姫の事あり然るに近隣
の民の歎を顧て兵庫の者と言るをば赦せを故に旅
客希に是を知てかく言れば虎口を逃る後に兵庫のものぞや
流名ふれといふ名あり漸三年にして三十人を殺し正に沈むるまでにて
其眷属群来と恨言事市中に喧し相集是
を痛み延る事五ケ月に向ひ重豪に讃州香川の
城主太井氏祖の嫡子松王小児讃州香川郡居住の跡并に三十三代の苗
音盤差公致とふ今中井氏にあらむ年甫十七なるが進み出曰人柱の身を以に

罪深し眷属の悲哀を見るに忍びずと願くは臣一人
を沈め三十人を赦し給はゞ憂は喜と成禍は福と
なりて龍神我が志を憐まば豈納受なからんや懇望を
再三なり相国大に感じて云彼が如き仁心忠孝の者にこそ
許し其志に任すべしと応保元年辛巳七月十三
日島の築留に経石及石の櫃に松王を入まゐて埋む
当寺に松王丸の影像あり龍王の怒も止あるかぞ築島成就せり扨島の
供養として叡山の観如上人を請じ千僧を集千
部妙典を読誦さし天皇も百官公卿を将て行幸

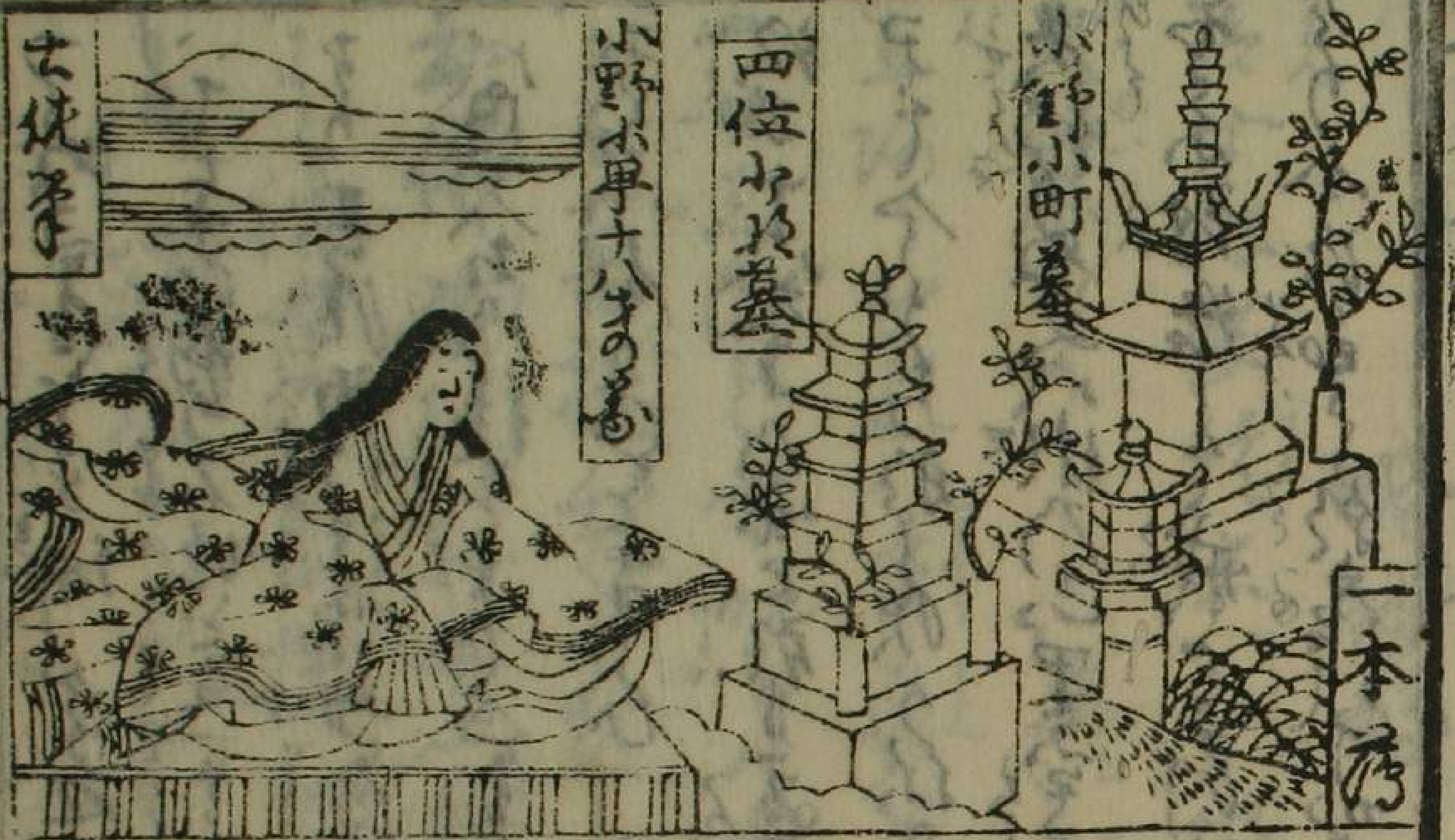
あらせ給ふ時に神楽山の嶺より紫雲湧のぼり
靉靆く聖衆音楽を奏し其中に松尾如意輪
観音と現じ光を放て来臨し給ふ群集の人々是を
殊勝也と拝み奉り時の思ひ深く歓喜の涙袂を
湿す 御門感信渇仰の余り五条大納言に命
し（此時の相図は御教書今に有）阿波氏部重能に奉行として升法
道の為に七堂伽藍を建立し（即松尾丸の如くて今に有）不断念仏
道場となし給ふ経嶋山来迎寺不断院と号し
世に篠村寺と唱へ給ふ
寛政四壬子年改

画入 小町寺略縁起 全

洛北 如意山 沙門

畧縁起

山城国小野庄市原村篠坂如意
山補陀洛寺ハ弘法大師の開基
小野良實ハ猶子小野小町此所ニ住
ける事あり深草少将通ひ給ひてなら
み凡今補陀洛寺に百年乃跡そ
住居して錦世の菩薩の様ニ
書付し此寺ニ居り給ひし
き○其錦世し
終ニ此所ニて身まかりたまひぬ



まゐりし近き世の跡とくり
弘法大師此寺を開基して此所迄
へ入て寺を
世の中に妹尾に来てまてき
まぬかれゆん四方へをみだも
とりてまて菓村をとりすへで
秋風に吹れて音もなく
おもかれゆきしたおひすり
とみと遍く音聲とみて目にみえへ
ゆき見たるてよく眼を究め鳥生

つゐにきえさせ給ふ　かの遍照大師彼亡霊を弔ひ其白骨をとり
て寺中に納め石塔を立一字経草(?)別しまた其人此石塔に寺号
より其後西行法師此石塔の前にて補陀洛念仏をとなへ回向
合掌入れの縁を思て△[illegible]人にいひやりけるに以[illegible]
[illegible]
[illegible]もとを九十九乃女と[illegible]△[illegible]此阿[illegible]
[illegible]乃[illegible]の一首[illegible]
[illegible]有小町乃亡霊[illegible]
[illegible]と[illegible]小野[illegible]

永禄三庚申年五月日　城北小野庄市原村補陀洛寺沙門

乙亥六月[illegible]

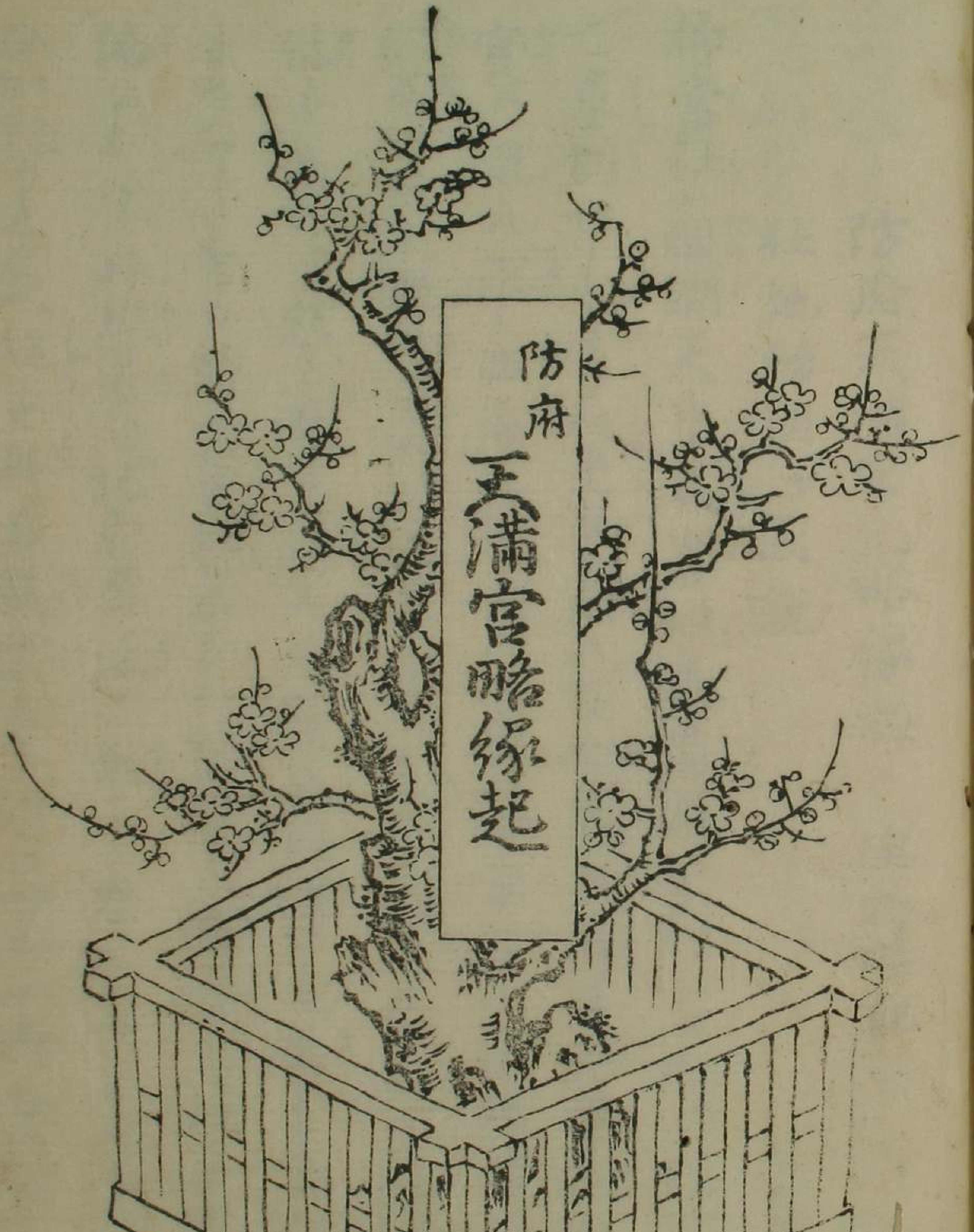
略縁起

洛東鹿ヶ谷住蓮山安楽寺

抑官女松虫鈴虫ハ今出川の元大臣殿乃姫君にて容顔美麗なりしかハ忽ちに院の御所へ入内ありて勅宣ありけれハ寵愛をえ給ひ入内しめひしにあまたの女官ねたみ給ふかりけれハ二人とも菩提心を發して清水寺に出て円光大師別時念佛修行しける会下へ来りて剃髪の身となりて後世の菩提といのらんと思ひまいられハ円光大師も御随喜ましまして円法の西下にかゝる大信心を發し全とげし有難く給ふのミならす世にすゝむる和の浄土宗に

つゐハ他力本願をもて出家素懐をとげんと心ざし出家して
口称念仏ぶふこの御事ハ他力の浄土往生を願ひなさんと思ひ
立たれし給ひて出家の儀を教へしめ給ふ法然ハ住蓮上人安楽
上人ハ当寺にて念仏の助業に六時礼讃を勤給ひしか
忠義喜歎の音声いと大勝なりけれハ諸人あつまりてこぞつて
こころおひまでしく松虫鈴虫も出家を願ひ出家受戒を
望みしふるに上人もさるべき事とて遂に剃髪なし出家したまひ是
亞ハ松虫ハ十九才鈴虫ハ十七才と聞へし其中も紫雲山もなり
本ハ女なれハ小督[illegible]として尼となりし又法皇熊野御参詣
の御留守なりしかは上皇大に[illegible]しかり給ひ[illegible]

かね思ひとゞまりけれハ女のいとくひまて御所をいづるより
出家住蓮ハ瀬川へ下り源にてひしに其の由申上けしかハ
ともに此忌みしく思召し其罪をのかれハ都を出されれ
御出家の後ハいづくにありと御尋ありしに[illegible]新竹の
うつせし人の御事ハ彼此かれこれとかく有けり出家
教へし事あり流罪につみ人いとさまざまに又あり遠流せられ
やがて打捨なし給ひしが松虫ハ讃岐国にて法の道
行ひすまし二人とも松の塩をして都を出で[illegible]にて
土佐の国の[illegible]の中にて住蓮ハ安楽を
大師と大僧の御流罪なしまふ[illegible]



むかしの人は太の浦より舟にての里安楽寺の生にて伝光
三昧院に成とそのひ松崎ハ五十余年ハ四十九年也
浄土念仏して世に行経王念に仕生の老若とともに
和光の道を口遊や須弥の家に入りの五十余年の
小つくし浅乃西海乃里の浦にまとよりんこと遠くる
ひきゐ道をわれ思ひの身の都の孤独に
まきれと父乃形すかたはなくおちき給くもなきのの也し
讃に云二女ハ西陣三位の内なれとも絵家業歌に
おくれ利といひ絵巻の切ハして女人往生
の光なれハ今の世まてもかうて実とし小帰し

防府天満宮略縁起　宝物略記

社地略図并図説

抑當社ハ醍醐天皇延喜四年当國の國司土師の信定始めて草創せしより以来星霜八百余歳也延喜元年御神無實の罪に沈み西海におもむき給ふ時官船を当國勝間の浦に寄せ給ふ國司を御なる様と見奉り且拝ミ給ひ且うやまひ國府に請じ奉りかしづき奉る信定ハ菅氏同姓の支屬なれば殊更深くありつし奉る時に菅神ふかたかなると逍遥したまふ御苑洛におとらぬ風景の地なれば深く執し思しめとゞへども叡ひかたなれば又鑑を解為鏡紫らうけら世給ふ御名此中ハ一

ぜひ御名残や深かりけん終に行に御恥見を残させ御没後
のわすれたまひぬるが三年を経てあやしき雲の上
に私引しられ信定ぬしされはひとはいそぐ人を筑紫に下
して同しむまゑが延喜三年二月廿五日配所にて薨したまふと
なり依て其おもむきを天聴に達し神廟を當山に営み渇
仰の信を致しけるが諸國に於ひて菅廟を建る始めなり
御在世の行状御没後の霊験等別本六巻の縁起に委し今弟
六當社の巻の心をとりて只其流を記を識に霊跡の和光本
地の弘誓祈に其験空しからんや依て當社建立の濫觴良に
ゆへとおぼさざる人のために摘み録め後世に廣く施まく思ふのと

一 御社の東の断径歴高山より巌石あり水滴る谷を瀬谷と
いふ是當社始めて建立の時水瓶を以て酒出け其いつのまにや酒に
流きり諸人汲み是をのむが砕るが如くして忽ち労を忘る
と云不思議を残せりしかるにんが為め此辺酒谷と号くとぞ

一 石の鳥居 高サ弐丈 額ハ天満宮とこれあり五條為範卿
の筆なり

一 膳間の浦御旅所に縁起に謂ゆる御舟の浜さしなから毎
年十月七日より祭禮始まりて同十五日彼浦に神幸を迎
恒例の式等挑行ふなり

十月乃大會 勅祭の古例にまうせく過ことをかくの社来を

止めしむ総て當家行列の壯観鼓吹の嚴密殊勝古雅なる事
諸國無類なり近来其略図をも楼門に掲ぐ今社頭に蔵
し奉る徴なれども坊中社家在邑國庄給人兼仕雑仕大小
神司ならびに當神勤の面々数百に及べり二八月廿五日を春秋
の祭とす饒附の祭典月次の連歌晨鐘夕梵の声絶ゆる
ことなし誠に無比の霊廟なり

寶物略記

一 御自畫御影　一幅
從古御神此地をさり給ふ御名残惜き
あまり御影を自ら池水にうつさせ給ひ御覧ありて
残し玉ふ水鏡の御影とハ是なり　今國分寺に水鏡の井とて秘水あり　すなわち菅神御影をうつし玉ふ井之

一 法華經　全部
菅神の御筆也妙法蓮華經の題号ハ正親町院の御震筆也

一 御太刀　一腰　銘神作
右三種ハ當社の秘宝なり

一 御縁起　六巻

一 舎利ハ相良遠江守絵ハ土佐将監光信なり 其外 佛舎利
念珠 唐錦 牛王宝 数多あり

寄附之古物

一 甲冑
源義経平家追討の為赤間関下向の時当国の沖ニ於ひて風波
俄ニ起て兵船あやふかりしかバ義経角当社ニ祈て難をさけ
為勝利を得られ帰陣の時着用の甲冑寄附之

一 唐太鼓
太閤秀吉公異国征伐の時寄附之

一 源氏物語 五十四帖

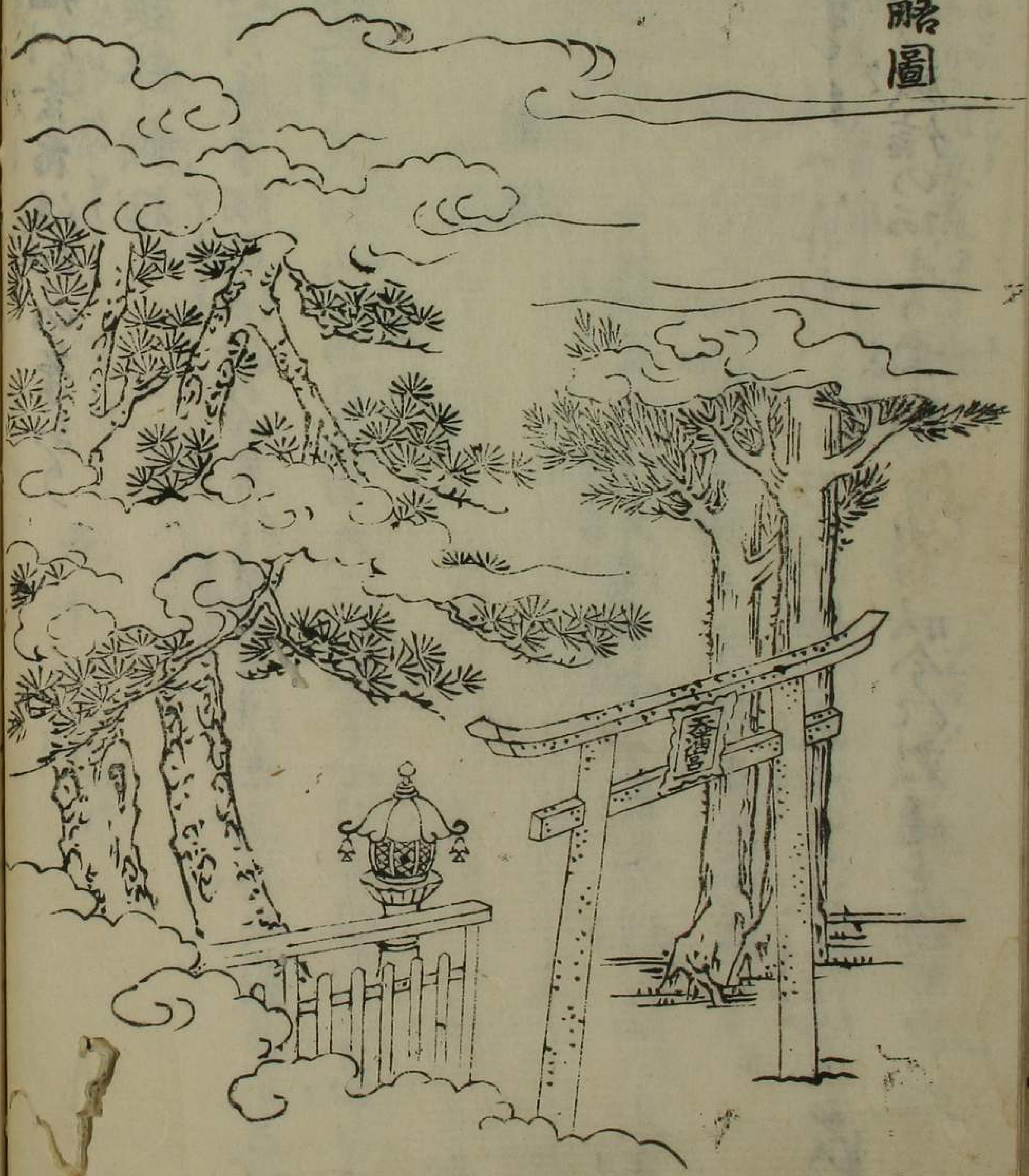
一 細川玄旨法印の筆なり

一 明題部類抄
松月庵筆 絹巴添状あり其外鎧太刀経書文具等数多あれバ
略之 獅子頭神馬の馬具 猿田彦二面何れも七百年以前の古器なり

図説

一 臺樓ニ懸りたる鐘ハ筑前国博多津史山より来りし鐘之銘に大旦
那比丘禅念寿王弥生蓮時ニ文応辛酉の歳とあり
御社の後ニ小井あり 数代の国主楽宿の時神龍現じ玉ひ
示あり 感信の信ましり常ニ寄附の状今に数通を存せり

社地略圖



安房國大山寺畧縁起

相模国大山寺縁起

夫当山は雄飛たる四方ニ雲を巻き八ヶ二千余
宝珠のかくあらハし霊験あらたなる霊場
然ルに人皇四十五代　聖武皇帝神亀之年華厳
二祖良弁大僧正始て草創なし給ふ伽藍八郎と云
般若師法運ま王僧正東国ニ下向して霊山を尋
相州大山ニ登り見るに東南ニあたりて大悲
然ルに高く山々を望み鳴を聞して直ニ高山ニ

箕面寺縁起に見えたり。それより桂本坊に至りし
て念誦し奉りしかば、彩雲靉靆として不動尊の像
うちに告給はく、是より東南にあたりて我を守護の山あり
其像を安置せよと（此処今方明寺と云）傳王丸に告給ふ。翌日その
のこる山に詣で（此処今朝見ツカトト云）白髪の翁に逢て問ひ玉
ふに、我は不動の尊像を安置せよとて、すなはち
霊地なりと告て、ぬしは見えずなりぬ。

是霊地なるの福地なりとて銭を得て、其所に
ひとつの宮を建て、此寺に銭を寄附し、又其後
本尊に祈りし銭を当寺に納めよと常に
此峰にのぼりて枝を折り、拝みて是を寄進し
奉り、其後又彦太郎なる者、経を写して納めし
事あり。其寺の名を（此処今寺名傳）傳へ寺領を与へて
寄附して（此処今カフシト云）上にて金を納めし縁起にこれを書

むかし髪をそりて此石今にありとそ此僧もゆへにいきてありしかは
しはらく留りてしつかに暮しけるに霊地なる里
人あまた是を見て怪しみ僧に来て怪しき事を問ふ
顕れたりと安置せんと歓喜の思ひを発して是を
祀りし里人再ひ来て具に致しぬ此八幡地主の
勧請しける也三所権現を崇め又其外に諸々
即ち大悲観世音并に不動毘沙門を安置し頭に権現を勧

請しその後南部郡の主所薬師像を作りてもて當郡に安置
行基菩薩數千歳經たる古木にて松人に命して是を伐
り始めおしもかに此地の木にて像を作り又書（此処今玉木ト云）
像を彫刻しりて納めける（此処今堂ノ前ト云フ）加持祈念
ましますに依ってその後堂建立八郎太郎
南部の藩主薬師像を彫刻し当山に安置して御臺
を建立し寺号を号ける也其後草創より後三年

一　智證大師前立平日高けしめて羅漢が爲に安置す 三
給ひて釈迦の像を刻み安置ありて爾来中興
の開山なりて文禄会古文書相模守北畠殿所
寄附あり但ハ宮泰親数代を寄与せらるゝ之
施入は四至（西限平塚 南限丸 東限鳴澤 北限鴻森）又正二位将軍尊氏公
祈雨満願によりて大般若經を書寫し轉讀料
として依田役頭を寄せらる伊賀仲聊槽谷入道正照等

に探せる石階四方金峯を遊ひし日蓮上人八年を
止まり習學し給ひし一宗弘通の大願を發し
一百日當山に籠て法華經八軸を書寫し給ふ
是其遺跡も正木大膳亮をして他墓なしひ石階
を修造せしむ当寺ハ多くの人の殿峯を皇
なりて衆人の知る所となり思しく一切に
開祖記す事其の他

霊寶

一神楽獅子二頭
康慶之作一頭者弘安五年秋七月雨乞之時走失醉酎池今尚一頭片耳存
頼朝公奉納

一倶哩羯羅丸釼

一八大龍王面
運慶之作
頼朝公奉納

一大般若経六百軸
永和三年尊氏公奉納
伊賀大炊源仲助奉之

一金剛十六善神
弘法大師之御筆
伊賀大炊源仲助奉納

一无釼不動尊
天竺毘修羯磨作

一法華経全軸
日蓮上人于光山住道善坊一宗弘通發誓願〻〻日當山参詣書寫奉納時年十九歳云〻
添法華経而奉納

一蟹香合

一天満天神銅像
同

一辨才天女銅像
同

一神變大菩薩
大菩薩御自画

一金剛蔵王権現
同

一画像不動尊
同

一懐釼
里見龙馬頭義弘公室奉納

一鏡十二面
同

一甲冑
右大将頼朝公奉納

一燈籠
田代中務大輔義廣奉納

一同
太田道灌奉納

一陣鞍一口
正木大膳亮茂時奉納

一涅槃像一軸
龍蓮社元譽見阿上人本尊依夢
想告而模寫焉安永年中奉納其
設旨別

享和三年癸亥十一月二十八日
改正時當三十三年紀開帳也

聖護院宮御直院
高藏山大山寺現住
法印榮克校書

茶神之由来

別當
二重寶院

茶神之由来

抑茶神と申すハ唐玄宗皇帝の時竟陵禅師水濱にて得たる所の嬰児なり師養育して弟子となしけるに長じては肯ぜず剃髪を恥易をもつて自筮し蹇の漸に之くを得たり曰鴻陸于漸其羽用て儀となすべしと則ちこれをもつて姓名となし遁れて出て或ハ優人の中に

隠れ或ハ伶人ニ交りて古調歌詩をうたひて
茗渓ニ至る所ニ菴を結びつゝ棗亭ニよる
称し猖曠野山林ニ遊び木を撃て佛経を誦し
古詩を吟じ流水を弄び日暮興つくれば帰りぬ
著はす所の書甚多く其上儒佛の妙理をきはめ
遂ニ太子の尊崇ニ拝せられて長寿ニして去る
常ニ茶を嗜ミ其真味を得られし茶経三篇を

著はされて是より煎煮の法茶の用具等
悉く備りて天下すべて茶を飲むこととはなりぬ
然れば時の人茶仙と号し又茶神と尊崇し
則此御神の御形を陶ニ造りて竈の上ニ置奉り
毎朝早く起出て茶を供じ又茶を汲て信仰なし
されば日々月々ニ家業盛昌なる事疑なしとて
茶商の人々ハ此御神を信ぜずんば有べからずとぞ

茶ハ是の上天子よりはじめ奉りて下萬民に
いたるまで一日も闕べからざるものにして殊に人として
ある愛相の第一なれバおのづから商売に人の
足を留るならば廓賑しく入来る人絶ずして
されば毎朝かまどの煙りもしげく賑ひ茶を煮ほど
目出度ものはあらざれバいよく此御神の餘光と
篤く信じて仰ぎ尊むべきものなり

右御神の尊像ハ年久しく當所境内の小社の内
相殿にありしを此度大願を発し一社を建立なして
思ひ立ていずれも自力に及びがたく依て茶商の家々ニ
及びなく候て茶家にかゝはる方々の一紙半銭の助
力をこひねがふものなり

緑日 毎月廿一日
例祭四月昔

四谷新宿
子安稲荷別當
重寶院

文政改元戊寅年五月

今川義元
織田信長

桶挾間合戰略記

織田信長
今川義元
桶狭間合戦略記

尾州桶狭間合戦略記

永禄三年庚申五月十九日尾州知多郡桶狭間において
駿河の国主今川治部大輔源義元と尾張清洲の城主織田
上総介平信長と合戦あり。主従八騎尾州愛知郡中嶋
の城を守護す。然るに義元の幕下にて尾州所々の
諸城を攻取り、今川家の兵を招き尾州大高の城丸根鷲津の城を
攻落し、大高には今川の将鵜殿長門守を入れ、鳴海の城には
岡部五郎兵衛、駿州の蒲原宮内少輔、三浦左馬助、葛山備中守を籠め置き、
浅井小四郎をも遣はし、信長を亡ぼし義元を上洛させんと
企てしに、信長清洲にありて手勢をすぐり、鷲津丸根の
手勢の者共とりも義元をせんと向かひ、信長も駿州勢
を川ちへ又駿河の勢ども味方に加はり手勢少なし駿州と戦ふにあたり

首を獲られ駿府へ送りぬれハ無氣無双の義元子氏真を立て忍ばしめ
今ハ是二の息信と云のハ倚事て是をしもと為りにき三河表
田の義も降参と成し有て今の謹慎すべし父業を切合せりしかれ
遂に裏切て切崩し去る永禄三年より又此辺の御手を
正に長多御父子在りて時に信長ハ三河表に並ばれ
是を以て和する事難しと時に信長ハ駿府の使者に...
國山崎に來り丹下天水砦中島に信光寺の砦を置き善照寺の砦ハ佐久間
在番す其外ハ丸根ハ佐久間大学鷲津ハ飯尾近江守丸根ハ佐久間大学
聖と云ふ臣汝らて今川義元ハ駿遠三の軍兵二万余騎を率し
五月十日駿府を発し同十七日尾州沓掛の城に着し先陣ハ
丸根の城を攻めて十九日に丸根鷲津の両城を攻落す丸根
鷲津の城に佐久間大学飯尾近江守を出して佐次ハ討死しけれハ城落て

防戦も此時駿河方の富士松井宗信後詰して又兵
三千の大勢を引率して丸根鷲津を攻めれハ佐久間大学飯尾近江守
信長ハ精兵を以て信長清洲を出て善照寺の砦に着しけるに
相ひ義元ハ桶狭間に陣取十九日鷲津丸根を攻落し悦て謡を
うたひ酒宴して油断しけれハ信長ハ善照寺の砦より
信長ハ熱田大明神に詣で武井夕庵に願文を書せ
大明神の社壇にて神前の鳴の音聞えれハ信長悦てしと諸士を励
まし是より中島の砦に移り義元の本陣に押寄て信長勢
の旗本の軍勢ハ又義元の陣の前にて打ちかゝり是を見て丸根
鷲津ハ義元と云ふ火の手上り佐久間大学ハ丸根鷲津ハ攻落され
と思ひ出し義元の本陣を押寄て丸根鷲津の両城落て
陳将佐久間大学飯尾近江守討死すと注進しけれハ信長是より闘

なくより去ば義元の本陣へ攻入んと桶狭間まで大高路より出陣ある
所の敗軍　幸ひ信長の先手佐々隼人正千秋四郎季忠を先として桶狭
うつ是を待設たりつゝ山岳岩室長門守討死し残念ながら引て勢を今川
の兵多く先とへ出て様子を見んと右佐々千秋岩室三人の首義
元へ実検に入れし義元かどうかうと悦ひ猶鎗百余の首館揃て東
兵卒に其て酒宴を催しける時分雨を烈しく降けるにも分け
信長を待ちまへしといさみすゝんで下もしるかゝて信長公は手に只富
の我は八十死一生の軍なれば殊を以て攻べしと若武者なそて二千あまり
にて備ひ陣にて勝者へし今川と云倉が山を成ゆへ出られける織田殿
同勝手方にて全く備を以て利を付けるは駿州は大軍敵は八二千に足らず
あれば此所を攻べしと旗をたれは信長は先を争て衆を討の郷を知らず
敵は勝ち誇りて油断せし其隙をうかゞひ給へと見へけり

此時吉報と聞しかば皆いさみすゝんで義元の本陣へ真一文字に打寄せ
られ既に大将軍の旗本にやゝ天候にわかに変り黒雲起り大雨
頻りに降かゝりければ御勢も共に今川勢は敵の来るも知らず陣取し
居しが聞とひとしく上を下へと今川勢さわぎあへり下知も届かず陣を
あらし散乱し今川の勢々を討取り後ろへ落ちゆくもあり信長の勢は
今川方の軍兵乱れて取るにかゝり大雨の間も討取りけるが陣を立直さんと
織田の近臣先手服部小平太一番に鑓を付け今川勢は崩れたち御本陣へ
同時に乱入して先を争ひ雷のごとし義元床几に腰かけておはしけるに
下知し給ふ義元の先手松井も討死し御旗本も乱れて今は是非なし
義元の君も自ら太刀を抜きて敵と戦ひけるが切結びて中々討れ
ざりけるが信長の家臣服部小平太と名乗り一番に義元
と戦ひ義元の膝を切りけるを毛利新助走り寄りて首を取る

瀧澤

床山語不如聞草迭由来

到ハ八才までの小弟を庇ふことなかりしかくも利新郎ハ久くまきり
義元を庇殺せよとの首を取り信長に献す信長大ニ悦び勲数
を与へられ武一鎖の今川家滅亡し去三浦左馬助の子盛氏
其人臣ら石川数正の関に戦ひす勢を輝く都府を遣阿揚州の籠氏
なかで勇氏の家臣の家の子の進みし事も記にし水理貴きなり
八郎ハ桜井佐渡守松平を殺し桜井新人ハ松平殿を友ひし事を二郎
まし家へ信長をも討ち八十余人を討れたる後に今川義元ハ騒ぎ立て乃
大守ハ英雄武威の名を振ひし其後にいつれも天運つきて一時に
一箇の家の滅びし事なり桜井の子ハ義元の為に討たれしの
上にもうらみの深き恩となりし事も義元の乎ニ十まで養ひし死
殺をさせて其人の如くに義元の事を伝へしき事も義元の位
牌八阿波の国より斗南大明神の書陳をまつり祀られたりし

夫物語不破関東国下りの由来

一此所を夫物語といふハ江州の住人浮世を渡りて爰に物かたりを

なせバ相色し此善問せす何へ分かむかし源義経ハ東へ

くだり給ひしに江田源蔵広綱といひし人は跡を志て奥へ

赴く此所に一宿しける其夜しく/\物語せしうち

彼は姓名をおのれ通じの家に泊り合せし人おまへを承れハ

江田源蔵広綱ならずや我こそ義経の御内をうけし静と申すもの也

君の御跡を慕ひ是まで来りしが付添ひし侍も皆道にて敵の為

うち死にし我も元服を抱き腰紐をかけしかバ漸くにとて

漸く命のうちをたすかり今君に逢へまいらせんと虎口の難をのがれ漸く

幸に爰に来りしなりける比も見る源流まで其方の孫なの
がうりとなくうきしさ幸に倫佛体の法の会なりんじうへ
名ともを伴ひあへきしみえきハ源義宏元て叔へ静に前ふくあし
爾ときにこの程の法々の抑もひ抑しなりの法にさりしくあそびう人を
九人安の是足うれ侶佑んく秋のもとでう壁を温くとものがくらし
卯月は山ふとはくちありしうんあのつくは山ふを更流しきれの里
娯様物でうしいかし侍る部ろものちも初く孫をみかくらの奇記
名跡ゐゆまりり上官をまき厚も
御上てりの御恵み公下至万代不易の蹤跡なり
一 此東の坂を車返しといい昔光院といひてやんごとなき

御方不破の関守月に達とまんうろくをなし都よりおりてせ
ちまきしして関守がもとにて宿りのびつしあまあり衍をくいかい旅し
となく屋根をあらこ宿りして右張ひ衍住なるかさうり坂上て
嵐うし右竹垣なる関守が家あまなり抔と貴殿なれと歌し
按ひく一首の御詠哥

葺かへて　月こそもらね　板びさし
とくすみあらせ　不破の関守

ともに赴き此坂より御車をかへし給ふ又更にせあそ実らは山ふを
車返しの坂といへり
上
不破の関といへるは揃ふやくやあかえんむかしよりなだかく

合戦のちまたとなれり　天武天皇大友の皇子と此所にて
御合戦ありし数万の軍兵爰にてうたれしにより七日の間血の流を
みるごとく黒血川と名付られ関原御陣も此所なり別して当家
五年九月十五日の大合戦日中より始り大雨車軸を流し不破川
濃州志く切捨たる死骸山のごとくにて人馬をなし水の色紅にして
敵軍粉骨の為に此川をふさぎ首をわたしかばねがせんだうとなる
のごとし凡て此所にて是を合戦としてかぞふるや此
前古戦場あまた記すといへどもあらましを略す

江濃両国境寝物語

日比野長五郎

安珍清姫

略物語

紀州日高川道成寺鐘巻

道成寺縁起に付て此の物語ハ人皇六十代醍醐天皇の御宇奥州
白川といへる所に安珍といへる僧ありけるが年毎に熊野権現を信じ山伏の姿と成
同紀州室の郡真砂の庄司が許を宿として毎年参詣の度に宿りける此庄司に一人の
娘あり名を清姫と呼けるが幼稚の比より容顔美しく殊に怜悧也けれハ
かの僧に向て戯れに云ひつゝ後来妻となして奥州へ具しゆかんなど
いひけるを姫ハ稚き心に誠と思ひいと嬉しげにいなむ気色も見えざりしハ悪
縁の初とぞ後に思ひ知られける扨延長六年八月の事也しが例年の如く
庄司が許に宿りけるにかの姫夜更人静まりて安珍が閨に忍来て兼ての約束いまや
かく今年ハ十六歳に及べりいまや妻と定め給ひ奥へ具して陸奥へ
わたせ給へとかきくどきて止まざれハ安珍ハうかつに戯れをいひし事よと
後悔すれども色にも出さず詞を巧みにかざりて只今ハ参詣の折なれバ

中々に具して下るへしと契りけれは未た修行をも遂ざれは下向を待給へ
住しく奥州へ下らんと云ふて明れは斎日寺と云ふ所に熊野へ詣て一
首の歌を詠ぜ八咫の霊烏も契りしを三熊野の神ぞ知るへからとよみけれは
書て出しけるに安珍心の内にはやかて思ひて逃るなんとは思ふ事も
やもあらて 三熊野の神の名ぞ空おそろしに誓ひ来れと縁
とく熊野へと急ぎて別れまいらせ娘は指を折て安珍か下向を
待ちて帰来の日数に待ち兼ねて外に出て待ちけるとかく道行
先達とおほしき老僧来りけれは娘立出て安珍か下向を
若き僧やなく行かれ候と問へは老僧先に逃けれは
老僧のいふ是ての若き僧は七八丁も遅れて今日は八十二三丁にも
是はなんぞ参り給ひて娘思ふ事や我を捨てて逃たらんと

中へ逃行けんと思ひつめ怒りの色顕れ追付の思ひに胸騒ぎ旅
人のたつぬる様に推量し女性の身なれ共足にまかせて
踏ぬといふ事はなし姫を耳にも聞入す後へ巻きあけて追かけけるか切目川といふ
川を打渡りて上の山といふ所に至り漸く追付安珍か衣の袖をとらへんとする時に安
珍心の中に権現を念し願はくは因果現在果欲知未来果現在
因果の経文を唱へ身を隠し逃れける其功力にや娘の眼くらみ
て後ろは暗く見えすして身を飛て体に領より上は蛇と成て腰より下は
姫の姿にて日高川の辺に来りけるに安珍は早舟に乗て
渡りし娘は大きに怒り川へ飛入泳ぎけるか忽ち毒蛇と成て
渡りて道成寺に至り安珍か足跡を嗅て後に安珍をとかく
して鐘を下ろし七巻巻て終に安珍を焼殺し淵に帰りける

及ぶ如蛇を長老城下と出て入口に院を死しけるかん丹羽は
元年九年帝子中能勢の後とくれは畢て其中に沈に殊に清楼の揚よ
至りては謡曲に作り今様に謳はしく戯場の舞臺に顕然とすれは
てん人是彼是を通りて其の信義を正しまへしと云

黄龍先生篆

安亡新田神君碑

南郭先生撰

不許翻刻千里必究

矢口新田神君碑

昔元弘帝出居南山。足利氏立先明帝于京。於是南北分朝。諸國各據其黨。戰爭數年。而新田氏舉族勤王。南朝宗人左中將源公義貞卒。其族衰。神君者中將公庶子。名義興。勇氣掩世。延文中以兵衛助為南帝密徇東國。欲將復張。先是足利氏使其子基氏居鎌倉。令關東畠山國清為副。時

共出次武列。患之。畠山以幕中士竹澤。嘗事神君。因使圖之。乃陰共謀。佯與竹澤有隙。遂之竹澤使謂神君曰。臣無罪見疑於國清。若得再事舊君。願有所效。神君納焉。乃飾美女進之。有寵。既而請饗已家。因圖害之。美人有夢懸。懼止。神君不出。竹澤不克果。而神君亦不猜近之。乃又密請畠山。使江戸氏二人助焉。亦佯遂之。二人

因竹澤來。神君納焉。於是三人比事焉。勸襲鎌倉。且曰。有衆難襲。使分士卒。先神君至矢口津。從者十三人耳。竹澤預與舟人謀。竅舟而塞之。使待于岸。既而神君與其人乗焉。中流舟人佯失墜船具於水。没而求之。陰去其塞。泳而逃。水入舟將沈。竹澤江戸夾岸伏甲。噪而出。神君悟既不可爲。乃怒呼曰。吾爲厲報女。自屠其胸腹

而沒十三人從死焉。後害者至津雷電晦冥。神君介而見。皆死。厲見不已津民懼。乃爲立廟追祀其神。至今四百餘年。人猶懼威靈。不敢褻慢云。今年丙寅。守山侯源賴寬。遣使立碑。自書篆額。乃使元喬撰舊史。叙其略勒石。係以迎送之辭。其辭曰。

霹靂激兮電揚光。龍車驚兮玄雲鄉。神之至兮歘以常。儼如在兮水中央。

被犀甲兮張彫弓。既一怒兮奮鬼雄。仇且殪兮鬱未窮。將以憺兮斂壽宮。蒸肴醴兮釆蘭蕙。潔余祀兮神無懠。固既毅兮勇以厲。掃妖氛兮永不晉。水澹澹兮清以冽。往又來兮羌可濟。良辰和兮天門霽。顧余降兮雲之際。

延享三年春三月。守山源賴寬篆。平安服元喬撰。烏石葛辰書。

建神碑守山侯頼寛乃松平大学頭従四
位侍従采地二萬石陸奥國田村郡守山
當主頼慎朝臣之祖父

武州荏原郡六郷領矢口村
別當　義興山明王院真福寺

文政五年壬午五月廿八日参詣宗伯受之別當所以
為土産

辨才天縁起

洲崎
吉祥寺

辨才天縁起

辨才天を稽首讃歎して申奉る哀愍
納受ましませ今四重の秘釋を申さば先
第一ハ実類の天是衆善あつまるゆへ衆
生の願ひ満足せしむ大威力あり第二ハ
権類の天本地の境界甚深なるをもつて
大弁才天女と現じたまふ第三ハ大日如来の
四無礙辨なり第四ハ一切衆生の福徳

智慧寿命識財皆此天の神徳なり
此天の本説ハ大日経の密印品普通真
言蔵品に説り又最勝王経大辨才天
女品に本誓功能真言形像讃歎等
を説り其外大元経大随求陀羅尼経等
にも辨才天の名を説り最勝王経にハ
大辨才天女といひ大元経にハ功徳大辨
といひ随求にハ辨才といへり又最勝
王経に閻羅の長姉又婆薮天の妹

といへり此天の功能ハ最勝王経大辨
才天女品に曰若智を求る者にハ
福智を増長せしめ若財を好む者
にハ多財を得さしめ名を求る者
にハ名称を得せしむ或ハ戦陣恐怖
の所或ハ火坑或ハ河海険難盗賊
等の怖畏又枷鎖又悪人殺害の
時心を散せずして念じ奉れバ皆
解脱ぞ又此天を敬禮する者

もろ〳〵と云ふ。すみやかに成じ法の病患の除き寿命延長なりといへり。妙楽大師の曰令須況のごとく修行の者をみやすに験ある有又年を累ても。またホしの徴しうき者あり いんと答て曰其機あつきは紀い定業をも轉じ機あさきときは 又正観すトの事も遠ざかるしと 三の疑をいへり一は自を疑ふ

二ッには他を疑ひ三ッには法を疑ふ一ッには自を疑ふとは我は底下の凡夫なり。いかで及んと二ッには他を疑ふとは此師深き智あるべからず。我をあやまらしめんと。三ッに法を疑ふとは此法理にあたるべからずと此疑ひ蓋障となりて。蔵塵なりと又華厳に曰若人一信をおこせば重罪諸難皆消滅をたとへば外の獣の多く七乳の中へ獅子が乳但一滴

入ざい外の獸の乳皆味となるがごとし
また此天の種子ハ此字此字ハ妙の義。衆徳
圓満して思議をたつする也 即。三形。ともに
琵琶なり外へ機するハ邪を摧く義也へ
引は正をあらはん義あり歐陽永叔が
推手を琵とし却る手を琶となすといへる
其由あるもやな深義あり是を思ふべし

洲崎辨才天尊　弘法大師御作
天満天神尊影　天神御自畫
右
桂昌院様御持念之尊像等なり
元禄十三辰年当所江社頭等御寄
造営則御安置也

普濟寺縁起

文化十二年乙亥六月以原本うつし

宗伯

瀧澤

八冊之内

文政八乙酉年三月より

當寺開闢乃由来ハ建久五年栄朝禅師草創の
霊地也其頃国部六孫太忠澄当郷を領地して
彼禅師乃道徳世ニ称するを感戴して偏力ある故ハ
時ゝニ行テ禅問法禮をなし信を篤し殿堂或
造営し則守本尊戦場勝利乃尊像十一面観世音
并一百体の観世音を彫刻して新伽藍ニ安置し其外
より十方乃道俗一同ニ帰崇する事勝てかそへ難し
抑六孫太忠澄乃家系を尋るニ人王三十一代敏達

天皇諱淳中大倉孫数乃後胤なり悪源太ハ義平ニ
属し平治元年己卯十二月廿八日平重盛と待賢門ニ
戦ふ事大ニ武勇を振ひ寿永三甲辰年二月七日摂州
一ノ谷乃合戦ニ平忠度を討チ首級を得る仍て勲功の
賞として忠度の采地五邑并忠澄ニ賜ル忠澄武州
秩父郡我野村ニ岩峰を鑿チ石室を造り其像を
石壁ニ彫刻せり其傍ニ禅院有忠澄庵と号ス又武州
榛沢郡岡部村ニ住する由人ニ岡部を以テ称号とス

墳墓同州郡乃岡部の村ニ有今猶存ス六弥太の末
孫まさとの是也郎従玉井某乃古墳有六弥太の末孫ハ
当時江戸深川ニ住する岡部氏ニして京都吉田家
よりの勧請を得て改寿忠澄霊神と称し六弥太
所持の長刀もつ今此岡部家ニ伝来せり
当寺本尊戦場勝利十一面観世音并一百体観世音
開山三宗兼学一山宗朝禅師
開基普済寺殿道海大禅定門　實名　忠澄

内室畠山重忠妹

玉龍院殿明和大禅定尼

開山乃事実元亨釈書にも詳也

宗祇廻国記に岡部乃原と云ハ彼六弥太と
云し武士乃旧跡なりし近代葬東の合戦に数万の
軍兵討死の有し所にて人馬の骨をよって塚ヲ
築今に古墳餘多侍りき
古来より傳記あまたあれとも事繁き故見やすからねハ大概
略し事記すもの也

宗祇乃前に

なおまたあかつき風の東の古塚に
榎乃葉しけし松をたつね哉

此縁起も年舊し変る板摺も文字ぬけ失けるなれは
開文もいかにも仍て岡部家乃当主忠英に
誂し事寛政六年甲寅十一月に再版

武州榛沢郡上岡部郷

玉龍山普濟禅寺

梅宮大明神延壽命神安産砂畧記

抑梅宮大明神ハ延喜式に曰山城國葛野郡小座神四柱と云云

第一酒解神 大山祇命 酒造の祖神 第二大若子神 瓊々杵尊 地神三代の神 第三小若子神 彦火々出見尊 地神四代の神 第四酒解子神 木花開耶姫命 安産守護神 右四柱也皇城南方鎮守日本大社廿二社の内國家安全五穀成就壽命延長安産血脈相續造酒守護の御大神也當社酒造の祖神安産守護神の事ハ日本記神代巻に委依畧之其後有故人皇五十二代嵯峨天皇 仁明天皇 后宮橘嘉智子橘家大祖井手左大臣橘諸兄公橘清友公橘氏公等合祭有て當社ハ橘氏の祖神也當社の砂を受て産家に敷事ハ橘嘉智子后妃に備り給て日嗣の皇子座まさぬを明暮なげき思召て當社 木花開耶姫命に祈り給しより程なく御妊娠座々けれバ産月にいたり當社の神殿の床の下の砂を以て御産家に敷給けれバ聊か惱もなく御平産有て仁明天皇御降誕座々殊に孝を以て天下を治給ひ皇統永栄させ給ふを奉仰世人

御吉例貴ミ當社の砂を受て産家にしき平産有て後産砂奉りと云其事え之
然ハ當社の砂を受て安産ありし人ハ當社え産砂奉り可有事也又　木花開耶姫命
三柱の御子産給ふ時以竹刀其御子の臍の緒を切給ひしを今に世人竹の刀を以臍の
緒を切ハ其根元也依て當社より箆を諸人にあたへ給也且又當社に傳り給壽命神石と
奉申ハ開運壽命延長安産血脉相續諸人愛敬疱瘡守護の神石也神代の昔
當社　木花開耶姫命ハ神石をもつて我神徳の巖と共に不朽常盤に
堅盤に守護めくみ給わんと祝し給ひしより當社に傳り給て昔より
奉懇祈人にハ心随て心願不為成就云事なしと云云
御代々御安産御守護
御本丸　西御丸江奉差上御守札御産砂奉献來候御事且當社の神徳の御事ハ
諸家日記國史等にも分明也依て大略を記而已

社務　[illegible]頭福謹記

抑紀伊國日高郡吉田村道成寺ハ人皇四十二代文武天皇の御願
建立にして本尊ハ丈余の千手観世音菩薩
海中より出現し玉ふ所の尊像にて殊に蛇身化益の誓顕著なる
霊場なれハ都鄙の参詣常に絶ず境内廣大にして本堂楼門庫
裡回廊鐘楼経蔵等を並へ荘厳又金玉を鏤め凡一千百余年の
星霜をふるといへ共依然として実に光闡南方の霊場也其来由
をたづぬるに昔世尊寺のほとり此社ほどちかき間武三丁の
入江ありて九海士の里と呼び九十九人の海士人住り或時海中に光ありてその
折り蜑人怪しみおそれて近よらんともせず一人の蜑ありて恐れず光る處に
至て海底に入て探り求るに終にこの赫奕たる尊像を得たり蜑人
奇異の思ひをなして土中にいつき處に柴の庵をむすひ安置し

奉て朝夕恭禮しておこたらず或夜其尊像遥人の枕上に立せ
給ひて曰汝我に事ること他にすぐれ深心に感ずる事浅からずゆへに遥人
夢中に告んや汝が我に祈りし事叶はしめん汝が一人の娘を持事今
にむなしく頭髪生ず汝われ大悲の佛力を以て頭髪を生ぜさせ
んと渇仰ありと見て夢覚たり奇特なる哉翌日より娘の頭
髪生じて丈に余れり遥人歓喜して其の髪の落一筋ありしを
人に論せじと捨へて則樹の枝にかけおきけるに雀来りてくはへて去り
遂に帝の欽に至りて紫宸殿の軒端に巣を食ふ或時帝叡
覧ありて女の髪なり雀の巣より乱れて地上に落たるを見たまひ不思議
なりとてかの巣を取よせさせ給ふに女人の髪にありし則この
髪の主を尋よとの宣旨ありて普く國々を尋求むるに紀州

紀伊国日高郡吉田村九海士の里に至りかの髪主を尋得て都に伴ひ
給ふ也奏聞しければ則娘を召れ叡覧ありて世に稀なる美婦人也とて
后にぞ備へさせ給ける去るに后は雨の降る日に必玉顔に涙をこぼして
物思ふ風情なりければ帝あやしく思召て其故を問せ給ふに后答て曰我古郷の寺の
前に安置し奉る観音ありしが此頃堂室漏て濡させたまはん事を
歎き思ひ侍る也と申させ給ひければ帝叡感ありて早速に修理有べき旨仰下さる
ただ一字を経営ましまして紀の太后の御願に仰て七堂伽藍を
御建立有て天音山道成寺と号し彼霊像を安置して九人の
海士人を神に祝はせられ九海士の文字を以て今に吉田村に住居有
て代々系統を続けて法人先祖の霊を敬せしとぞ